仙台北三番丁教会
2023年6月4日　三位一体主日礼拝

一つにする霊

仙台宮城野教会牧師　齋藤　朗子

コリントの信徒への手紙一12章3b～13節
3b）神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。
4）賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。
5）務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。
6）働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。
7）一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。
8）ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、
9）ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、
10）ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。
11）これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。
12）体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。
13）つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。

イエスの弟子たちが、イエスが約束されていた通りに「聖霊」を受け、さまざまな国の言語で神の偉大な業を語りだしたこと、そしてその直後に、ペトロが「十字架ではりつけにされて死んだが復活されたナザレのイエスこそが、神から遣わされた救い主であり、罪を悔い改めてイエス・キリストの名によって洗礼を受け、罪を赦していただいた人は誰でも、聖霊の賜物を受けます」と力強く語ったこと、ペトロの言葉を受け入れた3千人ほどの人々がキリストを信じて洗礼を受けて、イエスの教えを守るクリスチャンとなったこと、これら「教会のはじまり」とも言える神の御業が起きたことを記念するペンテコステ礼拝から一週間たちました。

聖霊は、2千年の昔も現在も変わらず「弁護者」として私たちと共にいて下さっています。聖書を読んでいると、聖霊のお働きというのは、イエス様ご自身の働きとほとんど同じであることに気が付かされます。

救い主であるイエス様は、弟子たちの保護者であり、養育者であり、友であり、教師であり、人生の同伴者でしたから、聖霊もイエス様に代わって、そのようなお方として私たちと共にいて働いてくださっています。カトリックの晴佐久昌英神父が、聖霊のことを「神様の親心」という言葉で表現することがあるのですが、わたしはこの表現の言葉で、目に見えない聖霊のお働きのことがより身近に感じられるような気がします。「神様の親心」を、人を用いて具現化するのが聖霊のお働きですから、誰かの奉仕や、人との交わりの中に神様からの愛を感じたり、愛を受け取ることができるなら、私たちの人生は孤独でもモノクロでもなくなって、「わたしはあなたがたをみなしごのままにはしない」と約束してくださったイエス様のお言葉は真実だったということがわかって、平安になれる。このような幸いな信仰者生活に私たちを導いてくださっているのが聖霊です。

そして、「イエスは主である」という私たちの信仰告白の言葉も聖霊によって与えられていますから、教会の礼拝においては、私たちは聖霊によって信仰告白をして、三位一体の神様に愛され救われ生かされていることをいつも再確認して、神様の親心に触れてホッとできます。たとえ教会で病気の癒しといった奇蹟的な出来事が起きなくても、異言や預言が語られなくても、霊的な熱狂状態というものが起こらなくても、イエスは主であると言い、父子聖霊を信じると言う一人一人の内に神様の親心はしっかり届いていますし、その時、その場で、聖霊は確かに私たちの間で働いておられるし、唯一の神の愛を伝えてくださっているのです。

しかしながら、教会というところは、礼拝で神様の親心に包まれて平安を得て、互いの交わりや奉仕の中に神様の愛を見出せる場所ではないと思わせるような状態になってしまうことも、残念ながらあると言えます。それは、私たちはキリストを信じる信仰によって救われたけれども、まだ救いは完成してはおらず、私たち自身がまだ罪の可能性を持っている不完全な存在だからです。

パウロが手紙を書き送ったコリント教会は、一言で言えば「都会の教会」です。国際商業都市コリントは、国際的な海運・貿易の一大拠点でしたので、さまざまな国の人々が訪れ、滞在し、外国の文化もどんどん入って来て、生活文化や芸術、思想や宗教面でも多様性のある都市でした。そういう土地で、さまざまな思想や宗教に少なからず触れてきた人々が、ある時に十字架と復活のキリストをわが主、我が神と信じても、それ以前に触れてきた思想や宗教や、その他のいろいろなものが邪魔をして、十字架による罪の贖いと救いによって示された神の愛に生かされるという非常にシンプルなキリスト者の信仰をすんなりと受け入れて、聖霊によって同じ思いで主に仕え、互いに愛し合う、そういう教会で平安を得るということが簡単ではなかったようです。そこでパウロはコリント教会の教会形成・指導・牧会のためにこの手紙を書かざるを得なくなったわけですが、

この手紙でとくに特徴的なのは、4節に出てきた「恵みの賜物」つまり「聖霊が与える賜物」について、12 章から 14 章にかけて他の手紙よりも格段に多く、詳しく深堀りしていることです。これはとりもなおさず、コリント教会の人たちが、聖霊（聖なる＝ハギオス、霊＝プネウマ）によって、実に豊かに、さまざまな賜物（カリスマ）が与えられていたからだと言えますし、だからこそ「聖霊の賜物」についての無理解も同時にあって、せっかくみなそれぞれが聖霊の賜物を豊かに与えられているのに、それを自分の能力

であると勘違いして誇ったり、賜物をもって人と競い合うようなことになってしまって、礼拝の中でも聖霊のお働きを通して神様の愛がぜんぜん伝わってこないし、愛餐や聖餐の場でも、わかち合い、助け合いの心すらない、そういう状態になっていたようです。

実際に 8 節以降を見ますと、コリント教会の信徒たちが、実に様々な賜物が与えられていたことが分かります。まず、聖霊によって「知恵の言葉」すなわち、救いや信仰にかかわる事柄について知り、悟るのに役立つ知恵の言葉を語る賜物をいただいている人々がいました。次に「知識の言葉」も同様に、神への信仰を深めるための知識（グノーシス）をいただいている人々もいました。9節には、聖霊によって「信仰」が与えられるとありますが、ここでは特に「賜物」と言い得るような信仰を与えられている場合を指すようです。例えば、信仰ゆえに兵役拒否をして処刑された人々や、「異教の地」での殉教者たちなどがあげられると思いますが、このような信仰心は、聖霊ご自身がそう意図された人物に与えられる賜物だとパウロは言っています。

それから、「癒しの賜物」というのも挙げられていますし、10 節には「奇跡を行う力」とあります。「力」はギリシャ語で「エネルゲーマ」、ここでは神の力の働きを指します。癒しも奇跡も、それを行う本人の特殊能力ではなくて、あくまで神の力、神の働きであるということです。同じく「預言」することも神のお働きであり、人のなすことが神のお働きによるものであるのかを「見分ける力」もここで聖霊の賜物としてあげられています。

それから、種々の異言を語る力とあります。聖書を読む限りでは、異言には、学習したことのない他言語を話すことと、誰にも理解できない言語がありますが、いずれにしてもコリント教会にはこの異言を語る人と解き明かす人、つまり何を話しているのか説明する力を与えられた人もいました。異言とその解き明かしについては、パウロは 14 章で語っていますので、今回は触れませんが、ひとつ知っておきたいことは、異言を語る力は聖霊の賜物であって、それを与えられている人もいれば、そうではなく違う賜物を与えられている人もいるということです。「ある人にはこの賜物、ある人にはあの賜物」とパウロは言い、その締めくくりに「これらすべてのことは、同じ一つの霊の働きであって、霊は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださる」と 11 節にあるようにです。もちろん、この賜物がいつなんどき誰に与えられるかは、神の霊が自由にお決めになることですから、私たちのほうが自分に与えられる賜物を勝手に限定する必要もありません。また、今日のみ言葉には出てきませんでしたが、伝道者や教師のつとめ、仲間や隣人を助けたり、教会のこまごまとしたところを管理をすることも霊の賜物だとパウロは語っていますので（12:28）、教会でささげられているすべての奉仕やそれぞれになっている役目は、どれも霊の賜物と言えるだろうと思います。

このように、さまざまな霊の賜物をいただいているし、異言を語る熱狂的な礼拝をささげてもいるコリント教会という群れ、愛情深い神の親心をたくさんたくさん注がれている教会が、それでも争いが絶えないし、一つになれないし、持っているものを分かち合えない。それは、霊の賜物を、自分のもの、自分の能力だと勘違いして誇ったり、主のため隣人のために用いるのではなく、それぞれが、自分のなんらかの願望をかなえる手段にしてしまっているからだということに、パウロは気が付きました。そこでパウロは、

あなたがたが行っているすべての活動をなさしめるのは、人の命の源である神様だし、私たちそれぞれに奉仕や職務をお与えになったのは主イエス・キリストだし、聖霊によって霊の賜物が与えられ、私たちの間に聖霊の働きが現れるのは、私たちが主イエス・キリストに仕えるため、そして教会全体の益になるためだと訴えました（4～7 節）。

主イエスに仕えること、また、全体の益となること。この二つのことにつながってゆく私たちの奉仕や活動は、聖霊の賜物の現われだというのです。ですから、このことが果たして教会において実現しているかどうか、私たちはときどき謙遜になって確認することは大切なことです。自分が教会でなしていることが、自分の満足や、自分の何らかの目的を果たすためではなく、主に仕え、教会の益となることかどうかを「見分ける」つまり「識別」するのです。見分ける力もまた聖霊の賜物であるとパウロは語っていますが、それがどんな人の思いやどんな霊からくる思いであり行動であるのかを聖霊の助け導きのうちに識別せずにどんどん進むと、世の知恵と知識ばかりが先行して教会が世俗化したり、人の「このみ」や「場の空気」で重要なことが決められてしまったり、神様の御心や愛の教えから遠ざかってある種の「異端」になったり、律法主義的になる、教会がカルト化する、ということにもなりかねません。

ヨハネ 10:27 では、イエス様はこうおっしゃっています。「私の羊は私の声を聞き分ける。私は彼らを知っており、彼らは私に従う。」主イエスに従い、主イエスにお仕えし、そのことが教会全体の益となる、私たちがそのような歩みをなしてゆくためには、数々の言葉のうち、なによりまず「イエスの弟子」として、イエスの声を聞き分ける必要があります。ですから、霊の賜物である「見分ける力」は、主の御言葉に親しむ中で、聖霊によって育まれる力とも言えるかもしれません。

そして最後に、パウロの言葉をもって付け加えるならば、どんな聖霊の賜物による奉仕にもまさるのは「愛」です。愛がなければどんな言葉も奉仕もむなしく、どんなに熱心な信仰もむなしいのです。そもそも、愛のない義務感だけの奉仕は、それをする人の心も霊もカラカラにさせますし、受け取る側も機械的になってしまいます。だから、「何よりもまず神の愛に満たされることを追い求めなさい、そして、霊の賜物を熱心に求めなさい」（14:1）と、霊の賜物よりも優先して愛を追い求めることをパウロは勧めているのです。神は愛であり、私たちのすべての活動・奉仕は、愛の神が愛ゆえに、私たちのために、私たちを用いてなさしめてくださることです。そして、私たちは愛の主イエスの弟子であり、主の愛がなければ私たちは生きてはゆけません。教会史に残るようなどんな事業や偉業より偉大なものは愛。私たちの不完全さをすべて覆い、「にもかかわらず」教会に喜びを与えてくれるのは神から与えられ、分かち合われる愛なのです。

祈り